

白山ふるさと文学賞

第十三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生 小説の部 優秀賞

「ターニングポイント」

鶴来中学校二年

高地^{たかち}

ちなみ

『僕っておかしいのか？』

僕がテレビをつけると、あるアイドルのインタビューが流れていた。

「アイドルになろうとした理由と相方を選んだ理由は何ですか？」

「あ、はい。そ、それは――」

俺は、初めてテレビの生放送に出演した。今までのライブとは違う感覚。一度深呼吸をして、

「俺がまだ煉という名前ではなく、藍那という名前だった時のある人との出会いの出来事だった。俺は――」

誰も知らない俺の秘密。唯一親しい友人と家族だけが知っている秘密。俺と彼女いや彼との出会いが俺の人生を劇的に変えたターニングポイントだった。今の俺がここにいるのはあいつがいたからだ。

俺は、小さい頃からスカートを好んで履かなかった。動きにくく、スカート自体が邪魔だった。小五までの間は、スカートを履いていたとしても何も違和感がなかった。けれど小六の時に憧れの存在が初めて出来た。あの人の色を取り入れたくて……。だけど、末っ子だから、おさがりばっかでそんな中当てはまる色の服を着ていた。それなのに、

「女の子っぽくなったね。ファッション分かってきたね。」

と親や兄弟が言う。その時私は

『こうじゃないとダメなんだ。私は他の人とは違うんだ。』

そう思うと同時に自分の性別に対し、違和感を覚えた。そしてこの気持ちには心の中にある一つの扉に入れ、鍵を閉めた。

中学校に上がる時、

『この違和感の正体がわかるかもしれない、この違和感がなくなるかもしれない。』

そう思っていた。けれどその違和感はなくならず逆に大きくなった。

「なんで触角ダメなん？勉強に何も影響しないじゃん。その校則マジで意味わからん。」

「それな。別にいいやろ本当に。」

そんな女子の会話が聞こえる。

『そんなことどうでもいいだろ。触角の何がいいわけ？私はかわいいなんて思われたくない。本当に理解できない。』

昔から男の人のほうが話しやすく女の人の気持ち理解できなかった。自分が女だつて決めつけられるのが嫌で、そんな風に決めつけてくる友達が嫌いで、そしてそれを作る環境が世界が大嫌いだ。生きるのが苦しく『死にたい』と一日に何度も何度も思い、

『男に戻れたら、もし男だったら。』

そう叶うはずがないことを何度も何度も心の中で願った。

中学二年になり、転校生が一人私のクラスにやって来た。彼女の名前は宮崎はる。初めは、その周りに男子や女子が多く集まっていた。けれど、一か月経てばそれは収まった。話していくにつれどんどん仲良くなっていた。彼女は、みんなとは違い私と同じような感じがした。一緒に遊びに行くことが多くなり、楽しい時間だけがどんどんと過ぎていった。だから、

『この人とならあの違和感を話しても、わかってくれるはず。』

何の根拠もなかったけど、何となく信用できた。俺の部屋へ。二人になった時

「はる、ちよつといい？私、昔から自分の性別が嫌いで、性別のことで死にたいって思ってた、もし男になれたらなって、男に戻れたならいいなって思っているけどこれっておかしいこと？はる、私って変かな？」

この空間が沈黙で包まれた。

「あつ、突然言っても困るよね。ごめん。今の気にしないで。ゲームしよう。何に、する？」

「そんなことない。」

『ん？何て言った。』

そんなすんなり受け入れられるはずがないよな。私の聞き間違いだと思っただけ返すと、

「ごめん聞き取れなかった。もう一度言っただけほしい。」

はるは、私の目を見ながら言った。

「そんなことないよ。」

聞き間違いでも何でもなかった。それでも俺は、

「なんでそう簡単に受け入れられるんだ。おかしいだろ。普通なら理解できねえだろ。どうしてそう簡単に言うんだよ。この私の苦しみや死にたいって思う気持ちわかんねえだろ。」

信用していた友達にたくさん裏切られ、人が本当のことを言っていることが信用できなくなった。だから私は――

「私だって小さい頃は男だと思っていた。だけどみんなからはあなたは女だからこうしなさい、ああしなさいと言われ、ずっとずっと親にもこの気持ちを隠してた。だから、全てを理解してるとは言わない。けど私も経験しているからこそ藍那の気持ち少しは理解できる。」

「本当の話？それ。」

「うん。本当の話。俺が本当に傷ついてた話。」

「そうなんだ。ん？てか、あれっ、今、はる自分のこと「俺」って言うってた？」

「うん。女でいる、女を演じるってことに疲れたからさ。藍那の前ではありのままの俺でいる。理解してくれる藍那の前だから。」

「じゃあ、俺もそうしよう。こんな男だから女だからって言うルールに縛られず俺もありのままにいる。ルールに縛られ続けられるってのは、俺じゃない気がするからさ。」

「お互い困ったとき、悩みがあるときは、お互いを助け合おう。秘密を知っている同士仲間としてこれからもよろしくな。藍那。」

「ああ、よろしくはる。」

毎日地獄のようだった日々。はるがここにきてくれたおかげで、俺

が勇気を出して話したからこの後の学校生活が最高の時間になった。はるは俺が親にこの秘密を話そうと思うきっかけを作ってくれた。それからたくさんのお出来事があった。中三の時に親に話し精神科に行くことになった。半年もかかってようやくこの違和感の正体がわかった。医者から性別違和だと診断された。性別違和とは生まれたときの性別と心の性別が一致しない人のことを指すそうだ。簡単に言えば体は女で心は男ということ。高校では先生にそのことを言っただけで対応してくれ、男に少し近づけた気がした。高校卒業後、適合手術をして男となった。男として生活して前まで抱いていた違和感が薄れていった。はるにもそれを伝えるとはるは、俺より先に適合手術をしていた。いろいろとはるは俺の背中を押してくれた。はるには感謝しきれないほどしてもらった。

はるから一本の電話が来た。

「なあ藍那、俺とアイドルやらねえか。」

「突然どうしたんだよ。言っておくけど俺は藍那じゃなく煉。適合手術の後、名前変わったんだ。てか、アイドルってなんだよ。」

「あついや。性別違和の人が身の回りにいるかもしれないって、俺たちを通してみんなに知ってもらえることができるだろう。親にも言えず性別のことで苦しんでいる人の少しでも助けになりたいんだ。性別のこと以外でも毎日苦しく、死にたいって生きる活力がない人に、生きる活力をあげたい。一番俺の気持ちをのせられる、歌という声という素晴らしいものを届けたい。だからアイドルを俺は、選んだ。もう一度聞く。俺と一緒に、アイドルを目指してくれないか煉。」

「いいじゃん。面白そう、お前に付き合っただけでやるよ。アイドルやろうぜ。俺たちで、世界を助けよう。」

俺とはるは心に決めた。

俺は深呼吸をもう一度して

「それが、アイドルになろうとした理由で、そしてはるを相方を選ん

だ理由です。」

「なるほど。そういう出会いがあったんですね。ということは煉さんにとっても、はるさんにとっても二人の出会いが人生を劇的に変えた出来事だったんですね。」

「はい。俺にとつて煉との出会いが、人生に大きな影響を与えたターニングポイントだったと思います。」

「本日はありがとうございます。煉さんとはるさんのインタビューでした。」

僕は煉さんやはるさんの昔の話を聞き、目から一粒の涙がこぼれた。その涙は同情の涙ではなく、うれしさの涙だった。

「僕は、おかしく、なかったんだ。こんなにも、こんなにも、近くに僕と同じ人がいたんだ。この苦しみがわかってくれる人が、いた。」

僕は溢れてる涙が止まるまで泣き、そして涙をぬぐい

「僕も親にこの違和感のこと言ってみようかな。」

彼らが僕の背中を押してくれたそんな時間だった。

